

コミュニケーションにおける「皮肉」のポリティックス

－「意味不安」による仮説的答え－

桜井芳生

【要約】

我々が日常行っているコミュニケーションに関して、エスノメソドロジーは数々の知見をもたらしたが、その一つとして複数の「世界経験」の競合と、そこからの「選択」をめぐる「皮肉」の効力の発見をあげることができる。しかし、エスノメソドロジー自体は、「皮肉」がなぜこのような効力をもつのかを説明していない。本稿は、「意味不安」を仮説することで、この問題に回答を試みるものである。すなわち、ひとびとは、日常において「意味不安」をかかえつつもそれを抑圧して意味経験をしている。しかし、その独特な「ダブルバインド」性という仕掛けでもって「意味の両義性」へとひとを直面させてしまう「皮肉」をいわれることで、ひとは自らの「意味不安」を励起させる。しかも「皮肉」を発話する者は二つの意味を使用しているわけだから、皮肉者は両者の文脈をみとおしつつもなお自分の立派に立脚しているように、被皮肉者には映ずる。よって、皮肉者の意味使用の方が妥当性がたかいように被皮肉者には映ずる。その結果、被皮肉者は皮肉者の意味使用（＝世界解釈）に服する蓋然性が高まる。このような仮説的答えを我々は提起する。

Politics of 'Irony' in Communication – a hypothetical answer by
'sense-anxiety' –

Yoshio Sakurai

【お前の心の迷いです】

エスノメソドロジスト、メルヴィン・ポルナーの論文「お前の心の迷いです」は、我々が日常行っているコミュニケーションに関して、ある重要な知見を我々にもたらししてくれる。それは、まず第一に、複数の「世界経験」が競合しうること。第二に、その「さまざまな世界経験」の競合を解決するには、いわば純論理的な方法では無理で、「政治学」的なやり方が不可避である、ということである。そして第三にその「政治学」的な世界経験の「選択」において「皮肉」という手法がおおくとられる、ということである。

ポルナーは、論文の冒頭部分で有名な『ハムレット』の父親の幽霊の場면을引いてこうのべる。

「ある人には、他のひとにはみえないことが見える。私たちがこの世界やそこに住む人々、あるいは私たちの知覚について抱いている常識的前提に照らしてみると、この世界について相矛盾した複数の経験があったとしたら—これからそれをリアリティー分離と呼ぼう—それは私たちを途方にくれさせる出来事だ。…「同じ世界が観察者によってそれぞれ異なってあらわれるという驚くべき事実」をどう説明したらよいだろうか。…他我は同じやりかたで自我に対応することができる。したがって、ただ単にいくとおりかの説明ができるということだけでは、リアリティー分離を解決し、コンセンサスにいたる保証にはならない。リアリティー分離には、根本的な両義性がつきまとっている。つまりそれにたちあっている人々のうち、どちらが現実を誤って知覚しているか、決めること自体が非常に問題となるのだ。」訳書41-42頁

このように、「世界」に対して相矛盾した複数の経験が生じること（リアリティー分離）がある。そしてそのさい、どちらが現実を誤認しているとするのか決めるのが当事者にとって大きな問題となるのである。

「さまざまな世界経験が表面上それと矛盾するようなあらゆる種類の証拠が存

在するにもかかわらず、それにさからって自己を維持できることを確認してから、私たちは完全に成長したリアリティー分離の解決には、…政治学が不可避免的にもなっている」訳書72頁

そのような「世界経験」の競合に対しては、それぞれの「世界経験」がそれにとって不利であるような「あらゆる種類の証拠」があったとしても、「それにさからって自己を維持することが」できる。したがって、複数の世界経験の対立を決着させるものは純論理的な手続きではなく「政治学」的な手続きである、とポルナーは考えるわけだ。

そして、このような「政治学」において「皮肉」というものが大きな役割を果たす。「リアリティー分離のダイナミクスは私たちが「経験を皮肉る」とでも呼ぶことができる一つの操作ひきあいだすことでもっともよく理解される。」43頁

「同一の世界について異なった経験が生じれば、それらはこの決定的な世界、つまり信任された世界と対立するものとして吟味され、表現され、誤った経験として扱われる。…この不公平な対立の操作には、経験を皮肉ることが含まれている。」44頁

このように、「皮肉」でもって、いくつかの競合する「世界経験」からある世界経験の選択の蓋然性が高められるというのは、我々の日常経験にてらしてもよくあることである。たとえば、『史記』「滑稽列伝」には人より馬を愛するあまり愛馬の死に国葬をもって報いようとした王に、「それは本当に御立派な所行です。ついでに国政も馬にお任せになればいかがですか」という家臣の話が出てくる、という（橋元38頁）。この場合、馬の死は国葬に値するという（王の）「世界経験」と、値しないという（家臣の）「世界経験」とが、競合しているのであるが、その「選択の政治学」において、家臣の「皮肉」によって、事態は、家臣の世界経験の方に有利に傾斜しているのである。

このように、ポルナーは、「世界経験」の競合性を強調し、複数の世界経験は論理的には解消不能であり、複数の世界経験のなかからどれを選択するかは、「政治学」的やりとりによる非論理的・実存的な躍動によるしかない、と主張する。そしてその「政治学」においては「皮肉」という社会的実践がおおきな効力をもつことを主張する。しかし、そもそもなぜ「皮肉」という手法が、このような「複数の世界経験からの選択という政治学」にとって以上のような大きな効力をもつのか、をポルナーは説明してくれない。これが本稿の問題である。すなわち、「皮肉」がなぜ、上述のような機能をはたすのかについての仮説的回答を試みること、これが本稿の課題である。

【「意味不安」仮説】

件の課題に対する我々の回答を提起する前提として、まずはあるひとつの仮説を提示し、読者と共有しておきたい。それはいわば「意味不安の仮説」とでも言うべき仮説である。我々は、日々、世界を意味的に解釈することによって日常生活を送っている。その「意味的に解釈」されたひとつの世界像が、ポルナーのいう「世界経験」である。ところで、意味的に解釈すること、あるいはもっと端的にいうと意味（的経験）とは、あるもののあるもの「として」みなすことにほかならないだろう（廣松的にいえば「所知的二肢性」）。そして、その際の「あるものAをあるものB₀としてみなす」という経験においては、そのみなされたものB₀には、じつは別のみなしの候補B₁B₂B₃…が他でもあった可能性として伏在しているといえるだろう（ルーマンのいう「諸可能性の過剰」ないし「意味における顕在化と潜勢化」）。そして、ポルナーのいう「世界経験」の競合性とは、その諸可能性B₀B₁B₂B₃…のうちでどれが選択されるかに関してはなんら論理的必然性はないのだ、ということである。

したがって、我々は日常においては、これらの諸可能性からの選択を、最終的には根拠のない「実存的跳躍」（ポルナー58頁）としておこなわざるをえないであろう。とすれば、その際、ある事態Aをある意味B₀「として」みなし

て経験していたとしても、そこには、「別の意味 $B_1 B_2 B_3 \dots$ であったかもしれない」という「不安」が存在し、その不安を抱えつつも無自覚化することで、我々は日常生活を行っている、という「仮説」を持つことができるのではないだろうか。これが、我々の提示する「意味不安」の仮説である。

【「皮肉」のダブルバインド性】

このように、ひとびとは「意味不安」を抱えつつも、それを抑圧することで日常の意味経験（ポルナーのいう「世界経験」）を行っていると言説しよう。そして上述のとおり、同じ状況に直面しても、それをどのように意味経験するか（ポルナーの言い方では「世界経験」するか）、上述のいかたでは、 B_0 としてみるか B_1 としてみるか…は確定不能である。

したがって、同じ状況を前にしてことになった「世界経験」をする者がいれば、両者は「政治学」的な相互作用（純「論理的」な相互作用ではダメなことを以上で述べた）を経ることによって同じ「世界経験」にいたるしかない。その際の「政治学」のひとつの手口としてポルナーは「皮肉」というテクニックを述べていた（というか件の論文ではもっぱら「皮肉」のみをあげていた）。ポルナーのこの指摘に同意しつつも、なぜ皮肉がこのような効果も持つのかについてポルナー自身が説明していないことが我々の不満点であった。ポルナー自身が説明をしていない「皮肉」のこのような「政治学」的效果の由来を説明することが我々の課題であった。

前に引いた『史記』の「人より馬を愛するあまり愛馬の死に国葬をもって報いしようとした王に、『それは本当に御立派な所行です。ついでに国政も馬にお任せになればいかがですか』という家臣の話」を考えてみよう。

ここにおいては、この「皮肉」が言われるまえには、王の「世界経験」と家臣の「世界経験」が「競合」していた。すなわち、王にとっては、愛馬が死んだこの状況は「国葬に値するもの」として「意味」経験（世界経験）されている。それに対して、家臣にとっては同じ状況が「国葬には値しないもの」とし

て意味経験されている。ここにおいて、家臣から王にむかって上述の「皮肉」が発話されるわけである（以下、皮肉を「言う者」を「皮肉者」、「言われる者」を「被皮肉者」と呼ぼう。）

あらためて指摘するまでもないが、「皮肉」の大きな特徴のひとつはその「両義性」にある。この例でいえば、「立派な所行」という「字義どおり」の意味と、「馬に国政をさせるようなばかばかしい所行だ」という反字義的な意味（いうまでもなくこれが「家臣」の本意である）との二つの意味をよみとることができる。このように「字義どおり含意」と「反字義的含意」との強烈な対比こそが「皮肉」のインパクトをたかめることはいうまでもないだろう。

しかもここにおいて、皮肉者は、被皮肉者に対してある「仕掛け（罟）」をかけている効果が生じているのではないだろうか。皮肉というものゝが字義どおりの意味と反字義的な意味との両方をもつがゆえに、皮肉がコミュニケーションされるときには、常に「皮肉であることが見過ごされる可能性」が伏在している。つまり「反字義的意味」が存在することさえ看過されて、ひいてはそれが「皮肉」であったことが被皮肉者によって気付かれぬ可能性が伏在しているわけだ。（これは、橋元らの「実験」からも推測できる。ここでは、「皮肉」と気付く頻度が、したがってまた「気付かれぬ頻度」もまた、測定されている。皮肉はそれと気付かれる場合もあれば、見過ごされる場合もあるのである）。（私自身、よく他人の皮肉を皮肉であることがわからなくて、あとになってあれは皮肉だったのか、と気付く場合がよくある）。

とすれば、皮肉を言われた者は、一度自分が皮肉を言われたと感知してしまつたあとにおいては、いわば「究極の選択」ともいえるダブルバインド的な逃れられない「二者択一」のポジションへと追い詰められていることがありそうなことになるだろう。被皮肉者（王）は、もし皮肉者（家臣）の「皮肉」を（それが「皮肉」であることをすでに感知したあとにおいてなお）無視したとしよう。すると、その「無視」は、自分がこの（家臣）の発言が「皮肉」であることでさえも気がつかぬ愚鈍な者（王）であること、を相手（家臣）に知

らしめてしまうような効果をもつ（と被皮肉者＝王には映ずる）だろう。逆に、「皮肉」であることを直視したとしたら、彼（被皮肉者＝王）は皮肉の文言の両義性（字義の意味と反字義の意味の二義性）がそこに存在していることに直面することになる（と被皮肉者＝王には映ずる）だろう。

つまりは、被皮肉者は、一度自分が皮肉をいわれたと感知してしまったあとでは、逃れることのできないダブルバインド的な罠にはまっているのである。すなわち、それが「皮肉」であることを無視することで、自分の愚鈍性を公認させてしまうか、それとも「皮肉」であることを認めることで意味の両義性へと直面してしま（っていることを公認させてしま）うか、の二者択一から逃れられないのである。

この点は、橋元が言及している「皮肉に対する後続応答の困難性」からも傍証できるのではないだろうか。通常の発話（会話）とは異なって、皮肉はそれが言われた際にそれにたいして「自然な」応答（返答）をすることがとても困難であることが指摘されている。これは、ここでの「ダブルバインド」性を念頭におけば、理解しやすいだろう。なぜなら、被皮肉者が、皮肉（の字義の意味）に対して「肯定的」に返答したとしたら、（例の「王」が、家臣に「そうしよう」と返答したとしたら）それは自らの愚鈍さを露呈させることになってしまう。「否定的」に返答したら、（「王」が「バカなことを言うな」といったら）、当初の自分のたち振るまいさえも否定してしまうことになる（馬を国葬しようとしている自分さえも「バカなことを言」っていることになる）。こうして、後続発話（返答）は肯定的にも否定的にも困難になってしまうのである。

こうして被皮肉者は、「皮肉であることを無視することで自らの愚鈍性をみとめてしまうか、それとも、皮肉の両義性に直面するか」の二者択一に直面させられる。そして多くのひとは、前者の方途「自らの愚鈍性の承認」を回避して、後者の方途「皮肉の両義性への直面」に至るだろう。しかし、この方途においても「被皮肉者」にはもう一つの大きな「仕掛け」が待ち受けているように思われる。

【「意味不安」の効果】

すなわち、「自らの愚鈍性の承認」を回避して、「皮肉の両義性への直面」へと到った被皮肉者は、上述の「意味不安」を励起させる蓋然性が高まるように思われるのである。ひとは自分の意味経験の妥当性に不安を抱きつつもそれを抑圧し意識野から追い出すことで、かろうじて日々の意味経験（世界経験）を行っている、と我々は仮説した（「意味不安」の仮説）。しかし、皮肉を言われることで、ひとは意味経験の偶有性（他でもありえたこと）に直面し、ひいては抑圧していた「意味不安」を目覚めさせてしまうことがありそうなことになるといえるのではないだろうか。

しかも、このような状況において「王」と「家臣」で「世界経験」の競合がおきていたとしても、そしてそれが上述のように純論理的には解消不能であったとしても、この場合にはたんなる「水掛け論」的な「どっちもどっち」の状況ではなくなるだろう。

なぜなら、「皮肉」をいわれた王の視点に立って考えてみよう。ここでは、王と家臣の「世界経験」は、だんだんに競合（対立）しているわけではない。上述のように「皮肉」には意味の多義性が必然的に含まれるがゆえに、被皮肉者の王にとっては、皮肉者の家臣は、たんに彼（家臣）の「世界経験」を述べているだけではなく、被皮肉者の王の視点（皮肉における字義的意味のレベル）と家臣の視点（皮肉における反字義的レベル）の両者に立ったうえでしかもそのうえでなお自分の視点を反字義的レベルに合わせているように映ずることがありそうなことになるからである。

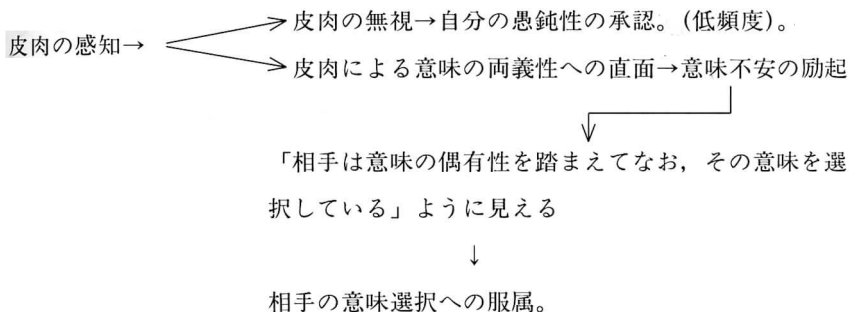
つまり、皮肉者（家臣）は皮肉の両義性をうまくさばけるがゆえに、「競合する二つの世界経験をふまえたうえでなお一方の世界経験を選択している」ように、被皮肉者（王）に映ずるのではないだろうか。たんに自分の世界経験に固執しているのではなく、相手の視点（世界経験）をも勘案したうえでなおも自分の世界経験を自信をもって選択し提示しているように、皮肉を発話するこ

とで皮肉者は、被皮肉者に映ずると思われるのである。そうであるとすれば、ここにおいて、被皮肉者の世界経験は彼自身にとって「意味不安」が顕在化した脆弱なものとして映ずるであろうのに対して、皮肉者の世界経験は、世界経験の偶有性（他でありうる可能性）を自覚したうえでなおそれを選択したとしても強固なものとして、被皮肉者にとって映ずる蓋然性がたかまるだろう。

こうして、「皮肉」という「政治学」的の手口を経ることによって、被皮肉者は皮肉者の「世界経験」の軍門に下る蓋然性がたかまることが予想できるだろう。

【回答案のまとめ】

以上が、我々の「回答」案である。まとめれば、「皮肉」を言われることで、被皮肉者はまず、「皮肉を無視することで自らの愚鈍性を認めるか、それとも、意味の両義性に直面するか」の二者択一に追い込まれる。多くのひとは後者の方途をすすむが、その結果「意味の両義性＝世界経験の偶有性」を自覚せざるを得なくなり、抑圧していた「意味不安」を励起させられる。しかも「皮肉者は、世界経験の偶有性をふまえたうえでなお彼の世界経験を選択している」ように被皮肉者に映ずる。その結果、皮肉者の世界経験の選択は強固なものに、自分の世界経験は脆弱なものに、被皮肉者には映じる。その結果、被皮肉者は皮肉者の世界経験の軍門に下る蓋然性が高まる、というものである。単純化して図示すれば、以下のようになるだろう。



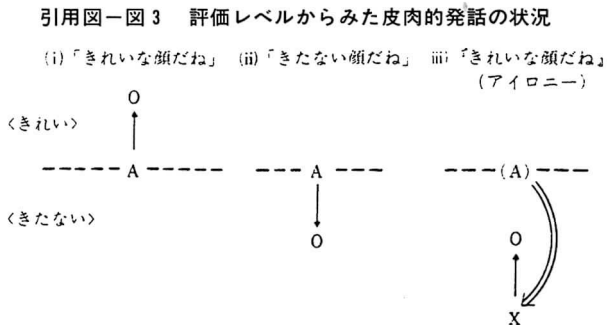
【先行説との比較】

最後に我々の答案を、先行する所説と比較して終わりたい。比較の対象としては、橋元の所説をあげるのがよいだろう。なぜなら、橋元以前の所説に関しては橋元の著作で周到に弱点が明示化されているからだ。我々は「到達点」として橋元説を利用することができよう。

皮肉（彼は「アイロニー」という）に関する橋元の所説はこうである。

「アイロニーの正体とは、結局、字義通りの発話が可能な立場の人間に視点を移し、結果的に「言及」とみなしうる陳述行為を行うという一種の「仮人称発話」なのだというのが本稿の結論である。」（橋元87頁）

説明しよう。橋元と描いた図（引用図－図3）をみてほしい。



まず (i) は、発話者Aが対象Oに関して、字義どおりの意味をもつ「きれいな顔だね」という発話をおこなった場合、(ii) は、字義どおりの「きたない顔だね」という発話をおこなった場合、(iii) は、皮肉的な意味をもつ「きれいな顔だね」という発話をおこなった場合である。

上下の距離は「きれい－きたない」に関する評価レベルを表し、横点線は相対的な平均水準（いわば「ふつう」）の位置をしめす。(i) の場合も (ii) の場合も、発話者は「平均的評価水準」に自己の視点を定めて、対象に対する評価を開陳している。評価は相対的なものであるから、もし仮に対象Oの位置（きれいさ）が水準以下であっても、それに対して「きれいだ」という評価を

加えうる立場の人間が存在する。それがXで表される→ (iii) 図。Xの視点に立てば、Oに関して「きれいな顔だね」といっても「字義的にも」妥当である。しかし、実際の発話者AがXはおろかOをも見下しうる立場にあること（すなわち (ii) の状況であること）が明瞭であれば、AとOとの「距離」とOとXの「距離」を足した分 (iii)における一本矢と二本矢を足した距離) だけ現実との乖離が生じることになる。その「距離」は (ii) の場合よりもさらに拡大されている。アイロニーとは、結局、現実には (ii) の状況にありながら、Xの位置に視点を仮説し、(i) の状況の命題を「言及」的に陳述すると言う形態の発話行為である。

皮肉 (アイロニー) が直截的表現より大きなインパクトをもつのは、このような「乖離の距離感」による。

以上が、橋元によるアイロニーの説明である。

橋元の理説は啓発性に富むものであるが、こと我々が問題にしている「皮肉の政治的効果」については説明力を有するように思えない。なぜなら、橋元の説明では、じつは対象Oに対する評価が当事者二人においてほぼ同じものであることが前提にされているからである。すなわち、先の記述でいえば、OはAの下方であることが二人のあいだで共有されていたのだ。しかし、我々にとって問題にしていたのは、このような対象の評価 (ポルナー的にいえば世界経験) 自体が当事者同士の間で一致していないような場合だった。橋元の図3 (引用図) でいえば、たしかに皮肉者は対象Oを「A→O」という「下方」のベクトルでもって評価 (マイナスの評価) をしていた。しかし、我々が問題にしたいような「世界経験が対立している場面」では、被皮肉者の評価は皮肉者の評価とおなじではない。むしろ、被皮肉者の対象に対する評価は皮肉者の評価と全く逆である場合さえある。つまり、被皮肉者にとって対象に対する評価は「O←X」というような上方のベクトルでさえありうるのだ (プラスの評価)。したがってこの場合、皮肉者がXの地点に「仮人称」化して「きれいな顔だね (O←X)」などといっても、それはたんに被皮肉者の対象評価 (O←

X) をなぞっただけになるわけである。よってここで皮肉者から被皮肉者への例の「政治学的」効果が生じるのは、橋元説だけでは理解しにくいのである。

【おわりに】

以上我々は、世界解釈の「競合」に対してなぜ「皮肉」が「政治学的」効果をもつのか、という問題に対して、我々なりの「回答案」を提示してみた。文中の行論からも分かるとおり、我々の議論は必然的な推論ではなく、いわば「こうでありそうだ」というような蓋然的な推測である。よって、我々の答案はたんに「仮説的」(暫定的)なものにとどまる。今後、この同じ問題に関する「代替仮説」が別途に提示され、本稿の答案との競合がなされることが望まれる。しかし、現在のところ、この問題に対する代替案は、私の知るところ、なさそうである(というか、この「問題」の存在自体が認知されていない)。(橋元のアイロニー論が、ことこの論点に関しては不満が残るのはみてきたとおりである)。問題ならびにその回答案を提起した次第である。

(本稿をなすにあたっての中野庸子氏の協力に感謝します。)

言及文献

橋元良明1989『背理のコミュニケーション』勁草書房

廣松渉1982『存在と意味』岩波書店

N.Luhmann 1984 Soziale Systeme. Suhrkamp=ルーマン1993 佐藤勉 訳 『社会システム理論(上)』恒星社厚生閣

M. Pollner 1975 'The Very Coinage of Your Brain: The Anatomy of Reality Disjuncture' The Philosophy of the Social Sciences: 5, 1975, pp. 411-430.=ポルナー 1987「お前の心の迷いですーリアリティー分離のアナトミーー」, 山田富秋+好井裕明+山崎敬一 訳 『エスノメソドロジー』せりか書房